

『死してなお踊れ』

2017年03月11日

私の育った村には「観音堂」という観世音菩薩が奉られている畳敷きの集会場があった。毎年お坊さんが来て、3晩くらい、仏教の講話をしていた。私は聴きに行き、こんな講話を覚えている。法事後の宴席で、酔の物が出た。お坊さんが「美味しい」と言ったので、帰りに、召し上がってくださいと酔の物を差し出した。するとお坊さんが、「それがいけない。あの時、美味しかっただけでいい」と言い、受け取らずに帰ったのだと。物事に執着せず、今を生きなさいという教えだろうと思った。

高校生の時、親鸞の語録『歎異抄』を読み、柔らかで広い世界に感動した。道元の『正法眼蔵随聞記』を読み、厳しくてとてもついて行けないと思ったが、仏教に救いを求め、お寺に通い始めた。熱心だったからか、お坊さんになるなら世話するよと言われたこともあった。クリスチャンになり、牧師になったが、仏教には郷愁と尊敬を持っている。

栗原康氏の『死してなお踊れ 一遍上人伝』を読み、一遍のアナーキーな生き方に魅了された。一遍は1239年に生まれ、10歳の時、母を亡くし、父に勧められて出家した。25歳の時、父が死に、病弱な兄に代わり、家督を継ぐために還俗した。二人の妻を持ち、子どもも与えられた。しかし、親戚同士の財産争いや妻たちの嫉妬を見て、32歳の時、再出家した。仏典、経典を深く読み、命をかけた修行をする。腹は座り、論争しても負けることはない。浄土宗は法然に始まり、親鸞が受け継ぎ、深化させ、一遍は九州から東北まで遊行、行脚し、全国に「念仏踊り」を爆発的に広めた。

「南無阿弥陀仏」の「南無」は帰依するということで、「阿弥陀」は衆生救済の慈悲の仏で、その光は尽きることがなく、さえぎられることもない。浄土宗は「南無阿弥陀仏」と念仏するだけで救われると説いた。一遍は、この教えをラジカルに押し進めた。仏は人を選別しない、誰でも無条件に救ってくれる。だから、富、学歴、知識、地位、名誉にこだわらぬ我執を捨て、ただ念仏する。人は阿弥陀によって既に救われている。仏になれる。でも、それに気づいてないから、全てを捨てて念仏を称える。これを、一遍は和歌で「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏なむあみだ仏」と詠っている。漢詩で下記のように書き残している。「南無阿弥陀仏は、あまねくいきわたった仏のおしえである。人間の世界にしても仏の世界にしても、あらゆる世界は一体だ。どんなおこないも自力我執の念をはなれれば、あまねく仏のおしえでつまれる。そうすれば、人間のなかでも、もっとすぐれたあのひとに、蓮の花にのったお釈迦さまのようになれる。」阿弥陀による絶対的な肯定である。人を差別しない、権力の意味を認めない、無償の慈悲に生きる。それは、家族、家、自分自身も捨て去り、無になる。一遍は、同行した時宗と共に結縁を求める人々に「念仏札」を配り、「念仏踊り」で民衆を狂喜させる。死ぬほど踊り狂って、頭を空っぽにする。全てを捨て、頭を空っぽにすることは死ぬことである。その死から新たな命が芽生えてくる。生き仏と尊敬されながら、自分の権威を求めず、教団という組織も作らなかった。ただの念仏僧として、51歳で生涯を終えた。

キリスト教と似ているではないか。主イエスは差別された者と共に生き、その低さから権力者の偽善を徹底的に批判した。パウロは、主イエスの真実（十字架と復活）によって、全ての人が既に救われている、だから、十字架で死に、即ち、自分を捨て、無償の愛に生きて、復活の命に与ると説いた。著者・栗原氏は、管理社会の中で上昇志向に疲れ切った現代人に、アナーキーな一遍を紹介し、考え直すことを促しているのではないか。